

エクスカベーションX

sasagani

プロローグ

一九九九年九月二十六日、長野県小県(ちいさがた)郡鷹爪山(たかつめやま)――。

夜も更(ふ)けた山の中、巨大な流紋岩の露頭に二人の男女が腰を下ろしている。

逢(あ)い引きのような、色気のある光景ではない。

二人とも泥にまみれた作業着に身を包み、顔も土で汚れている。

「全く、こんな勝手なことをして……院生や教授にバレたら大目玉だぞ、姫吹生(きぶき)」

眼鏡をかけた若い男が苦笑交(ま)じりに言う。

理知的な性格であることが一目でわかる相貌だった。

姫吹生と呼ばれた女が鼻を鳴らした。

「御影(みかげ)え、あんたってば心配性だねえ。みんな宿舎でヤケ酒かっ食らってるさ。バレたらバレたで素直に謝りゃいい。許してくれるよ――だって、こんなにすごいモンが見つかったんだから」

姫吹生が後ろへ顎(あご)をしゃくる。

そこには穴が掘られていた。ただの穴ではない――一辺がちょうど二メートルの正方形で、一メートルほど掘られた穴の底では細かな何かが月光を反射している。

それは黒く輝く石――黒燿石(こくようせき)だった。

原石ではなく、何者かによって砕かれ、手頃な大きさの塊を取り出された残滓(ざんし)だった。その何者かは、遙か一万年前の古代人である。

「せっかくの試掘(しくつ)調査が空振りに終わるのも何じゃないか。それに、あたし達にとって初めての調査でもあるしね」

姫吹生は御影にウインクを飛ばした。

二人は同じ大学で考古学を専攻する一年生で、夏休みを利用して行われる遺跡調査に参加し、この山に赴いていた。調査対象は先史時代において広く用いられた黒燿石の原産地――つまりは古代人がそれを採掘した場所である。

本格的な発掘は来年を予定しており、今回はその下調べをするための予備調査だったのだが、予想されていた地点の試(ため)掘(ぼ)りは全て外れた。期間を伸ばし、さらなる作業を進めたにも関わらず成果はなく、調査団の面々はひどく落胆していたのである。

姫吹生と御影はそれに納得できず、夜半に二人だけでこっそりと宿舎を抜け出して鷹爪山に入り、そして見事に採掘址(し)の一つを掘り当てたのだった。

「なあ姫吹生。おまえ、どうやってここが当たりだって知ったんだ？」

「んー？ 勘(カン)だけど」

御影の問いに、姫吹生は何の臆面(おくめん)もなく答えた。

「勘(カン)っておまえ……」

御影は呆れつつも感心した。

調査地点から少し離れたところであるこの遺跡を見つけたのは姫吹生だった。経験のある上級

生や教授達にもわからなかったものを、ついこの間入ったばかりの一年生が見出したのである。

しかし、ただ感心して引き下がる訳にもいかなかった。

「あのなあ、考古学ってのは学問なんだぞ。型式学、地層学、歴史学、それに文化人類学。そんな広範な知識の基礎があって初めて機知(インスピレーション)が降ってくるんだぞ。なのに、おまえは——」

堰(せき)を切ったようにまくし立てる御影に、姫吹生はうんざりとした。

「んなコト知ってるってば。けど、勘(カン)でわかっちゃうんだから仕方ないじゃない。あんたこそ、知識を得ることばかりにこだわってたら機知(インスピレーション)も何も降ってこないよ」
「ぐ……」

凶星を突かれ、御影は返す言葉を失った。口ではああ言ったものの、姫吹生が時折見せる直感的な洞察力は彼にはないものだった。努力を重ねて得たものではない天性の力——御影はそれを羨ますにはいられなかったのである。

しょんぼりとうつむく同級生を見て、姫吹生はふうと息を吐いた。

「安心したよ。調子は戻ったみたいだね」

「……ん、ああ。まあな」

御影は歯切れ悪く答える。

彼は昼間、調査中に奇声を上げて昏倒していた。

何も出ない場所を掘るばかりで気が参ったのだろうと、調査団の面々は彼を宿舎で休ませることにした。

調査が終わった後に姫吹生が見舞ってみると、御影はすでに復調していた。体の調子は元に戻っていたものの、その表情はなぜか暗く沈んでいた。姫吹生が夜の調査に誘ったのも、そんな彼を心配してのことだった。

「姫吹生……俺はもう、人間ではないのかもしれない」

ぼそりと呟くのを聞き、姫吹生は訝(いぶか)しげな顔をした。

「藪(やぶ)から棒に何言ってんのさ。生真面目なあんたが冗談を言うなんて珍しいね」

しかし、御影の顔は真剣そのものだった。

「冗談なんかじゃない。俺は……俺はとんでもない力を手に入れちゃったんだ」

「とんでもない力だって？」

「ああ、そうだ」

御影は右手にはめていた軍手を外した。

高校時代からボクシングをやっているというその手は、理知的な顔に似合わないほどゴツゴツとしていた。

御影は掌(てのひら)を上に向けた。

「見てろ……」

そう言うと、掌に夜闇が凝(こご)った。

ずずず、と何かを引きずるような音を立て、御影の掌から黒い塊がせり出してくる。

「それは……黒燿石？」

姫吹生は眉根に皺(しわ)を寄せた。

その目には、はっきりと黒燿石の塊(かたまり)が映っている。

手品ではない。

それは、確かに御影の体の中から生まれた物だった。

「超能力ってやつか……あんた、そんな力をいつー」

問いかけて、姫吹生の直感(カン)が働いた。

「まさか、さっき倒れたときに……？」

御影は静かに頷(うなず)いた。

「昼間、俺は観たんだ。この山の上に、逆さまになったもう一つの山があるのを……」

もちろん姫吹生はそれを見ていなかった。だが、それを即座に幻だと断じることができないほど御影の言葉は真に迫っていた。

「山には、もう一人の俺がいた。その姿を見つけた瞬間、山が……いや、もう一つの世界が俺に向かって落ちてきたんだ」

御影は膝(ひざ)を抱え、身を小刻みに震わせながら語った。

「俺ともう一人の俺の顔がぶつかった。そして俺は……数え切れないほどの世界と、そしてそこに住む無数の自分を観た……」

それが、彼が奇声を上げて失神した理由だった。

「何でこんな力を持ったのかはわからない……けど、原因は間違いなくあれだ」

「御影……」

「うるさいっ！」

姫吹生が肩に伸ばそうとした手を、御影は乱暴に振り払った。

「ダメだ、俺はもうダメなんだ！ ボクシングも考古学も……こんな体になっちまったら、普通の生活なんて送れる訳がない！」

日頃の冷静さは微塵もないほど取り乱す。

「くそ、くそっ……」

腰掛けている岩に拳を何度も叩きつける。

皮膚が破れ、どくどくと血が流れるのにも構わず振り下ろされる拳を、姫吹生は手首を掴んで止めた。

「やめな、みっともないよ」

それを耳にし、御影はきっと睨(にら)み付けた。

「おまえに何がー」

言おうとしたその顔に、平手が飛んだ。

ぱん、という音が闇に飴(こだま)した。

「甘えたこと言ってんじゃないよ。あんたはこの道をー考古学を学んで決めたんだろ？ 男が一旦決めたことをつまんない理由で投げ出すんじゃない」

姫吹生は御影の両肩を強く掴み、真摯(しんし)な眼差しで見つめた。

「安心しな。あたしはその力のことは誰にも言わない。だから、あんたも黙っているんだ。後ろ

めたく思うことはないよ。誰だって他人には知られたくないことのひとつや二つはある。丸裸で生きてるヤツなんて一人もいないんだから……ね」

言い終え、姫吹生はにこりと笑った。

「……………」

御影は複雑な表情を見せて逡巡(しゅんじゅん)し、そして小さく頷いた。

「よしっ！　じゃ、この話はこれで終わりだ」

姫吹生は御影に寄り添うように座り、その肩を抱いた。

「見てみなよ。きれいな星空じゃないか」

御影は悄然(しょうぜん)としつつ顔を上げた。

つい先ほど見ていたものと変わらないはずの夜空が、まるで違う光景として映る。

数十数百の星々がそれぞれの異なる光を発しているのがわかった。

「キラキラだねえ。未成年じゃなかったら、これを肴(さかな)に一杯やりたいところだよ」

心底感動している姫吹生の言葉に、御影は少し救われたような心持ちになった。

「……キラキラ、か。なあ姫吹生、その言葉の意味を知っているか？」

御影の問いに、姫吹生は首を傾(かし)げた。

「え、ピカピカ光ってるって意味だろ？」

「違うよ」

御影は苦笑を漏らした。

「あーっ。あんた今、あたしのこと馬鹿にしたらろ？」

「してないしてない。ただ、ピカピカで用が足りるんだったら、キラキラなんて言葉は要らないよな、って思ってさ」

その弁解に、姫吹生は不満げに口を尖(とが)らせた。

「じゃあ、キラキラってどういう意味なのさ」

「語源は雲母(きら)——つまり雲母(うんも)のこと。黒いのに光ってる様から転じて、果てのない闇の中でも光を放つことを表しているんだとさ」

「へええ……ってことは、黒燿石もキラキラってことだね」

「そうだな」

ふふと笑い、御影は視線を夜空に戻した。

「なあ、御影」

並んで星を見上げながら、姫吹生は語りかける。

「何だ？」

「……あたしは、あんたが観た別の世界を観ていない。あんたが今感じている孤独感や恐ろしさを共有したいとは思うけど、観られないモンは仕方ない」

御影は相槌(あいづち)を打たずに耳を傾(かたむ)けた。

「けど、こうしておんなじ夜空を眺めることはできる。おんなじように感動することもできるんだ。あんたは独りじゃない——これだけは、よっく覚えておいてよ」

姫吹生の誠実な言葉が心に染み渡る。

「……ああ、わかったよ」

感(かん)極まるのをこらえながら御影が答えるのを聞き、姫吹生は満足げに微笑んだ。

――しかし、彼らはまだ知らない。

異なる世界を観測した者が御影の他にも多く存在することを。

それにより世界が大きく変容していくことを。

そしてそれがこの二人の道を大きく違(たが)えてしまうことを、さしもの姫吹生の直感(カン)と洞察力でも見抜くことはできなかった。

生命が無数の平行世界を観測し、そこに住まう己を認識するという特異な現象は、オルタレイション・バーストと呼ばれた。

一九九九年九月二十六日、全世界規模で発生したこの現象により、平行世界の己の可能性から量子レベルで力を引き出す者が多く現れた。

人の常識を超越した力を得たこの者達を、民衆は人と人ならざる者との決別の意味を込め、異世界の扉を叩いた者達——ノッカーズと呼び、心の底から恐れ、そして容赦なく迫害を加えたのである。

忌(い)むべき存在と見なされたノッカーズの中から、その力を犯罪に悪用する者が数多く生まれたのは無理からぬことであった。ときとして銃器すら通用しないほどの力を持つノッカーズの前には、警察ですら無力に等しかった。

二〇〇一年、日本の警視庁はノッカーズが引き起こす凶悪犯罪に対抗するための犯罪能力者対策部隊を発足した。

Blitz Order Of the NPA Toward Shadow（警視庁対能力者電撃機構）——略称B O O T S(ブーツ)と呼ばれるその組織は、B O O S T E R(ブースター)という特殊武装システムを駆使し、強攻策も辞さない構えで犯罪ノッカーズの対応に当たったのである。

しかし、ノッカーズ犯罪は依然として減少せず、むしろより悪化の一途を辿(たど)っていた。

異能者(ノッカーズ)と普通人(ノーマル)——両者が互いを理解し、受容し合うことのできる世界は、まだ遙けき彼方にあつた。

※ ※ ※

二〇一〇年・夏、東京都東久(ひがしひさ)市——。

都心に勤(つと)める者のベッドタウンとしていち早く開発が進められたこの市(まち)には、意外と知られてはいないがいくつもの遺跡が眠っている。中でも川に沿って集落を形成する縄文時代から昔のものが多く、先史時代の人々が愛したであろう自然は、地下水からの湧き水や雑木林という形となって今も受け継がれている。しかし、彼らが暮らした痕跡が明らかになるのは、皮肉なことにその自然が取り払われてからだった。

「はい、みんな集まって。これから遺跡見学をはじめまーす」

若い女性教師が声をかけると、プレハブ小屋の前に十数人の中学生が集合した。

「夏休みだからって気は抜かないように。これはあくまで学習活動ですからね。それでは、案内をしてくださる方をご紹介します」

教師に促(うなが)されて前に出たのは、眼鏡をかけた神経質そうな男だった。

「この古山(ふるやま)遺跡の調査団の主任をなさっている、御影(みかげ)章兵(しょうへい)さんです。御影さん、よろしくお願ひします」

「どうも——ああ、先生。一つ訂正させてください。私はこの調査団の主任ではなく、主任代理です。本籍は大学院にありますので」

「も、申し訳ありません……」

細かい間違いを指摘され、教師はぺこぺこと頭を下げた。

「では、案内しましょう」

御影は生徒達を連れ、プレハブ小屋の前に広がる発掘現場に足を向けた。

「この東久では、これまでに大小合わせて百を超える遺跡が見つかっています。この古山遺跡はその中で十八番目に発見されたもので、縄文時代中期――今からおよそ四千五百年前の人々が暮らしたと思われる遺跡です」

御影の説明に無駄なところは一切なかったが、淡々とした口調でいかんせん退屈だった。中学生達の中には早くもあくびを漏らす者が出た。

御影はそれを横目で見したが、諫(いさ)めようとはしなかった。

(いくつかのコースに分けられてレポートを書くと言いたが、遺跡班は外れクジということか。興味のない連中に、どれだけ説明しても……)

と、呆れを通り越して諦めの心境だった。監督するのは担任教師の役目と割り切り、御影は変わらぬ調子で遺跡の案内を続けた。

「遺跡から出る物のことを遺物(いぶつ)と言います。大半の遺物は土器の破片や石で、たまに石器――石の鍬(やじり)やそれを作った際の屑(くず)が出土します」

「人の骨は出ないんですか？」

真面目そうな女子が質問をした。

「出ませんね。この国の土は大昔に火山灰が振り積もった酸性の土壌で、骨や歯のようなカルシウム分は融(と)けて失くなってしまいうんです」

「そうなんですか」

訊(たず)ねた女子がふんふんと頷きながらメモを取る。やる気がないと思われた他の中学生達も、同じような行動を取っていた。

(興味がなくてもレポートのためなら仕方ない、ってところか。最近の子どもは良くも悪くも素直だな)

と、心中で皮肉を言う。メモを取る姿勢は認めつつ、御影は反面でそのような学習には何の効果もないと確信していた。御影が不快に思ったのは、そのような主体性の感じられない学習態度ではなかった。

(この国の考古学は、斜陽(しゃよう)だ……)

御影が嘆(なげ)いているのは、先人の足跡に敬意を払わず、それどころか軽んじてさえいる昨今の風潮だった。

この国の考古学の発展は、高度経済成長期の大規模開発の際に国土の各地で多くの遺跡が発見されたことに大きく影響を受けている。それは今も大差なく、発掘調査の大半が開発に伴うもので、純粋な研究を目的として行われる発掘調査は極めて少ない。この古山遺跡の調査も、新しい公民館を建てるためのものだった。

御影の胸中に様々な思いが渦巻いた。

遺跡が保存できないことへの無念――。

それ以前に、遺跡調査そのものが遺跡を壊す行為に他ならないという矛盾――。

文化財保護に力を入れない行政への不満――。

そして、己の行く末への不安――。

――全ての思いが、負の感情だった。

それらは、これまでも幾度となく御影の胸に去来していた。

(姫吹生(きぶき).....)

その度、御影は十一年前のあの夜のこと――唯一心を許せた異性の友の顔と言葉を思い出し、何とか自制してきたのである。

だが、最早(もはや)それも限界だった。

(すまん、俺はもう我慢ならんのだ)

御影は拳を強く握り、眼鏡の奥に鋭い光を走らせた。

それを知らず、横で中学生が声を上げる。

「おおー、ユンボだ！」

大声を出したのは、先ほどあくびを漏らしていた男子だった。指差す先では、中型のショベルカーが調査地点の中心に居座っていた大きな木の根を取り除いていた。

「すげー、かっけー」

初めて生き生きとした表情を見せる男子に苦笑しつつ、御影は手を挙げてショベルカーの運転手に合図した。

がこんがこんと音を立て、ショベルカーが止まる。運転席から出てきたのは、豆絞りを巻いた小柄な老人だった。

「ボランティアで手伝ってもらっている、上屋(うわや)さんです」

「.....どうも」

上屋はぺこりと会釈した。

「こんにちはー」

と、中学生達がお愛想(あいそ)程度の挨拶をするが、上屋は気もそぞろにちらちらと御影の顔を窺(うかが)う。

御影は応じるように小さく頷き返し、そして教師を見た。

「すみません、先生。これから調査の打ち合わせがありまして。代わりに別の調査員のご案内します」

「えっ、あ、はあ」

そんな話は聞いていないとおろおろする教師に構わず、御影は掘った土を運んでいる調査員の一人を呼び、案内の役目を交代した。

去っていく生徒達を見送ると、上屋はおどおどとした様子で口を開いた。

「み、御影さん。本当にやるんですかい？」

「ええ。すぐにでも」

御影はきっぱりと答えた。

「.....俺あ、やっぱり――」

上屋が口にしかけた言葉を御影が遮(さえぎ)る。

「やると言ったらやるんだ」

声を抑えつつも強い語調に、上屋はびくりと体を震わせた。

「.....あなただって不満がおありなのでしょう？ 雑木林を壊し、湧水(ゆうすい)を潰し、河川に工事を施して再開発を行おうとする市行政の姿勢に反対し、あなたは造園業から身を引いた——そうですよ？」

「そ、そりゃそうですけど.....でも、あんな子どもを.....」

「手を貸さない、と？ ふ.....それは構いませんが、覚悟はおありですか、上屋さん。私は知っているんですよ。あなたがノッカーズだということを」

それは、上屋がひた隠しにしてきた秘密だった。知人にはもちろん、妻や息子夫婦にすら教えていない。

「幸い、あなたの力は姿を変えるもの。事が上手く運びさえすれば、あなただということは知られずに済む.....確か、先月お孫さんが産まれたんでしたよね？」

上屋の頭に、待ちに待った初孫の顔が浮かぶ。

「その存在が認知され、人権保護の法整備も整えられてきてはいますが、ノッカーズへの差別は未だに根強い。あなたがノッカーズだと知られば、お孫さんの将来は.....」

御影はわざと言葉尻を濁した。

上屋は怒りを顔に滲ませるが、すぐに逆らえないことを悟る。

「.....わかった。手伝うよ」

観念した上屋を見て、御影は片頬を吊り上げる。

「そう言ってくださると思っていました」

「だが、これだけは約束してくれ。絶対に人(ひと)死(じ)には出さねえってことを」

「わかっています。私が憎んでいるものもあなたと同じ.....行政(システム)なのですから」

言い終えるや、御影は精神を集中した。

その体の内から黒い石の塊が浮き上がり、全身を覆い尽くしていく。

今まで自分を抑えてくれていた友の顔が、再び脳裡(のうり)をよぎった。

(すまんな、姫吹生.....)

己を思ってくれた友との約束をかなぐり捨てたその姿は、まるで悪魔のように変貌していた。

同じ頃、東久市に隣接する練馬(ねりま)区――。

石神井(しゃくじい)図書館の地下にある区の郷土資料室の一角で、区内の遺跡から出土した遺物の整理作業が行われていた。

四台の会議テーブルに新聞紙が敷(し)かれ、その上にはプラスチック製のカゴがいくつも並べられている。テーブルの周りには向かい合わせのパイプ椅子が六組あり、片方の椅子には人が座り、もう片方には新聞紙が敷かれた上に水を張った灰色のバケツが置かれていた。

エプロンを掛けた中年女性が、カゴの中から土のこびりついた土器の欠片(かけら)を取り、ブラシを使って汚れを洗い落としていく。泥の取れた土器は空のカゴへ――流れるような慣れた手つきに、隣でそれを見ていた少女が目を丸くする。

「うわあ、早いですねえ」

心の底から感動の声を上げたのは、少し大きめの眼鏡をかけた細身の少女だった。

「うふふ、まあね」

中年女性は自慢げに胸を張り、力こぶを作った。

「何せこの道二十年だもの。葵(あおい)ちゃんは無理に急がなくていいよ。いくら早くっても、汚れが落ちてなかったら意味がないからさ。早さより丁寧さが大事！」

「はい、頑張ります！ よーしっ」

泥混じりの水飛沫(しぶき)が眼鏡に飛ぶのも構わず一生懸命に土器を洗う少女を見て、中年女性は感心した。

「和田(わだ)さんもいい子を紹介してくれたねえ」

少女――横山(よこやま)葵は中学三年生でありながら、この練馬にあるアパート・あおば荘の管理人もしていた。元々管理人をしていた祖父が昨年亡くなったため、その後を継いだのである。ただでさえ学業との両立は苦労が絶えない上、あおば荘の住人達は普通の人間ではなかった。

文字通り、普通人(ノーマル)ではない――つまり、あおば荘に住んでいるのはみなノッカーズだったのである。話に出た和田さんもその一人で、普段は同じような中年女性の姿をしているのだが、年齢と服装を自由に変えることができるというノッカーズ能力を持っていた。

和田さんはこの整理作業に不定期のパートとして参加していたのだが、昨夜重い物を持ち上げようとしてギックリ腰になってしまった。その代役を頼まれた葵は、嫌な顔一つせずに快諾(かいだく)したのである。

「若いのに苦労人だわね、葵ちゃんは」

「そんなそんなっ！ ありがたいと思ってるんですよ。ちょうど、夏休みの自由研究の課題を何にするか悩んでいたところだったので」

葵は照れ隠しの言い訳をした。その前向きで素直な性格の持ち主を見て、中年女性は顔を綻(ほころ)ばせた。

「ギャラクティカ十四ポンド！」

そんな二人の足下を黒いボウリング球が転がった。球は葵の向かいのパイプ椅子に激突した。上に置かれたバケツがひっくり返し、バシャ、と泥水が思い切りよく葵にかかる。びしょ濡れになり、葵は三秒ほど硬直した。

ボウリング球に大きなタンコブがぷくりと生まれる。

「あ、あいてて……」

黒く細い棒のような腕が伸び、白い手袋がタンコブをさすった。

「よっこらせっと」

短い足が生え、体を起こすと、そこには顔らしきものがあった。太く大きなバツテンの中に、丸い目が二つと横長の長方形の口。額には赤い稲妻のようなマークが刻まれていた。

謎の物体のくりくりとした目が葵に向けられる。

「おっ、葵！ 全身びしょびしょだがどうした？」

とぼけた様子で言うと、葵はわなわたと身を震わせながら、握り拳を作った。

「……ギャラーサーンー！」

葵はひっくり返ったバケツを手に取り、謎の物体にすっぽりと被せた。

「おおあっ！ く、暗いっ！ これはまさか惑星直列グランドクロス？ 太陽はどこだ、太陽を返せ！」

くぐもった声で騒ぎながら七転八倒する球体——ギャラさんを尻目に、葵はタオルで顔と髪を拭(ふ)いた。

「もうっ！ いい加減にしてよね、ギャラさん！」

「まあまあ、葵ちゃん」

ぷんぷんと腹を立てる葵を、中年女性がギャラさんのバケツを外しながら宥めた。

「そうだぞ、葵。短気は未練の元って言うだろ？」

「ギャラさんは黙ってて！ もう、着替えなんて持ってきてないのに……」

濡れた服を見て困った顔をする葵に、さっと畳んだジャージが差し出された。

「ほい、これ使いなよ」

そう言ったのは、薄いブラウンの髪の女だった。

「え……でも……」

遠慮する葵の肩を、女はぽんと叩いた。

「気にしなさんなって。これは発掘用に置いておいた物だから平気さ。サイズはちょっと大きいけど、何とかなるでしょ」

「え、ええと……お名前は？」

礼を言おうと思ったが、葵はその女の名前を知らなかった。

「あたしはレラ。姫吹生レラだよ」

「ありがとうございます、姫吹生さん」

「どういたしまして」

女は葵にジャージを渡すと、自分の持ち場へと戻っていった。

「更衣室はあっちだよ」

中年女性に案内され、葵は整理をしていた部屋を出た。

「あの……姫吹生さんもパートの方なんですか？ それとも区の職員さん？」

「いや、レラちゃんはボランティアだよ。春頃からかねえ、仕事が休みの日にちよくちよく手伝いに来てくれてるんだ」

「へええ。何のお仕事をなさってるんですか？」

「ちゃんと聞いたことはないけど、何でも警察の人らしいよ」

「えっ……」

葵がそこで驚いたのは、レラの職業を意外に思っただけではなかった。

(刑事さんなのかな？ ギアラさんを残しちゃったのはまずかったかも)

ギアラさんはノッカーズである……と、言われている。手や体を変形させて様々な力を発揮するが、どれも他愛なく、空回りばかりしている。

その非常に異常な存在は、葵やおおば荘の近所に住む者にとっては当たり前となっていたが、よく知らない者——特に警察にとってはそうではない。

(ギアラさんは人畜無害だけど、ノッカーズには違くないもの。いつもの調子で変態な言動や行動をして気を悪くさせたら……)

葵は落ち着かない心持ちで着替えを済ませ、早足で整理部屋に戻った。

ドアを開けた途端、ギアラさんが両手と両足の裏を合わせて飛び上がるのが見えた。

「ギアラクティカテリブルコメット！」

全身を錐(きり)揉み状に回転し、向かう先には姫吹生レラがいた。

「ほっ」

レラはキャッチボールでもするかのように楽々とギアラさんを受け止めた。手の中で回転が止まると、その頭をむんずと掴んで転がす。どこから出したのか、部屋の隅に並べられたボーリングのピンを全て倒し、ギアラさんはそのまま壁にぶつかった。

「いよっしゃあ、ストライク！」

レラがガッツポーズを決めた。

「く、くそ……」

ギアラさんはよろよろと立ち上がる。壁にぶつかっただけなのだが、なぜかその体は傷だらけだった。

「……ならば、次はこれだ！」

白い手袋をはめた左手が変形し、ドリルとなった。

「ギアラクティカメテオスパイラル！」

敢然(かんぜん)と言い放つや、左手のドリルが発射された。もちろんレラを攻撃するつもりだったが、そんなギアラさんの思惑とは別に、ドリルはハチャメチャな軌道を描いて整理部屋を飛び回った。

遺物に当たったら大変だと思い、葵は注意しようと身を乗り出した。

「ギアラさん、ここでそんなものを使っちゃー」

まるでその声に反応したかのように、ドリルは直角を描いて葵へと飛んだ。背後に回り込み、

そして――、

「きゃあっ！」

ドリルの先端が刺さったのは、葵の臀部(でんぶ)――おしりだった。

恥ずかしさに赤面する葵の眼鏡の奥で、怒りのゲージが限界を振り切った。

「あ、葵、すまん……」

それを察し、ギャラさんは恐怖に身を縮(ちぢ)こませる。

「……ギャラさん、ちょっとこっち来て」

そう言いながら、葵はおしりに刺さったドリルを自分の左手に装着した。

「お、おい……やめろ、葵。話せばわか――」

後ずさりするギャラさんの頭を葵の右手がむんずと抑え、そして阿鼻叫喚(あびきょうかん)の地獄絵図が繰り広げられた。

キュイキュイというドリルの作動音、ガリガリという何かが削られる音、加えて断末魔の叫びが整理部屋に響いた。

「あっははははは！」

レラは腹を抱えて笑い転げた。

「……すいません、みっともないところを見せて」

済まなさそうに葵が頭を下げる。

「謝る必要はないぞ、葵。元はと言えば、こいつが俺に挑戦しなげっ」

葵の右足がギャラさんの頭に落ち、ぐりぐりと床にねじり込む。

「あ、葵っ、リノリウムの味を俺に教えたいというおまえの気持ちはありがてえがっ……お、意外と甘いぞコレ」

そんな夫婦(めおと)漫才を見て、レラは一層大きく笑った。

「あはははは！ ひ、ひい、苦しい。もう勘弁(カンベン)してー」

「本当にすいません……」

しゅんと小さくなる葵の頭に、レラが手を乗せた。

「いいんだよ。ちょうど昼休みになったところだったし」

時計を見ると、十二時を過ぎていた。

「さて、お昼にしましょうかね」

中年女性の一声で、整理作業をしていた面々は昼食の準備をはじめ。葵も二人分の弁当を出そうと持ってきたナップザックを開いた。

「お、テレビがあるじゃねえか」

ギャラさんは部屋の片隅にあるテレビに気付いた。

「ポチっとな」

鼻をほじりながら、電源を入れる。

「もう、勝手にいじっちゃダメよ！」

葵が諫めようとしたそのとき、映ったテレビ画面の上隅に緊急ニュースの字幕が浮かんだ。

「お、何だ何だ？」

続いてお昼のバラエティー番組がヘリコプターからの空撮に切り替わる。「中継・東久市役所上空」というテロップを見て、中年女性が口を開いた。

「おやまあ、お隣りじゃない」

と、のんきな気分でいられたのはそこまでだった。

「な、何よこれ……」

画面に映し出された光景に、その場にいた全員が息を呑む。

直方体の市庁舎の周りを、いくつもの巨大な黒い石が囲っていた。場が騒然となっているのは、ニュース映像を見てもすぐにわかった。

ヘリからの映像が市役所前に変わり、女性レポーターが現状を伝える。

〔大変なことが起こりました。一時間ほど前、突如現れた二人のノッカーズにより、この東久市役所が占拠されてしまったのです！〕

カメラが黒光りする巨大な石壁を映した。

「これは……！」

レラが身を乗り出し、ギャラさんの頭を押し退けた。

〔ご覧ください。つい先ほどまで、この石は影も形もありませんでした。恐ろしいノッカーズ能力です！〕

その石を見て、レラの顔色が変わった。

「……黒燿石だ」

つい数分前までの快活さは微塵もない、緊迫した口調と表情だった。

「何だそりゃ？」

と、ギャラさんが出した質問に、横から中年女性が答える。

「黒燿石ってのは、ガラスみたいな黒い石のことよ。ほら、ここにもある」

そう言って、整理部屋にあった標本箱を見せた。箱の中には小さな石器が並べられていた。

「これが黒燿石でできた鍬(やじり)。あとたまに、こんなのも出るんだよ」

指し示したのは、親指ほどの大きさの石器だった。

「あたしにも専門的な話はわからないけど、これは獣の皮に穴を開けるための石の錐(きり)なんだって。今風に言うと、ドリルってところかね」

「なぬ？ ドリルとは聞き捨てならん、勝負っ！」

標本箱に突撃しようとするギャラさんの顔面に、葵の裏拳が炸裂した。

「ふざけてる場合じゃないでしょ！」

葵が振り向くと、レラは食い入るように画面を凝視していた。

再びカメラがヘリに切り替わる。黒燿石の壁に囲われた市役所の敷地に大きな怪物がいた。カミナリ竜のような長い首の異形(いぎょう)は、ノッカーズ能力による変化――いや、おそらくは能力により建設用の重機と同化しているものと思われた。

〔――しかも、犯人の一人は中学生三人を人質に取り、市庁舎に立てこもっているのです！〕

空撮の映像が流れ、市庁舎の屋上を映し出す。そこには黒づくめの人物が立っていた。ただの黒い衣装ではない。それは黒燿石と同じく鋭い輝きを放つ装甲だった。

〔ルバオオオオオオオオンッ！〕

黒耀石の怪人が雄叫びを上げた。耳まで裂けた大きな顎、真っ赤な口腔(こうくう)、赤く光る六つの眼、背中からは黒い石の柱が何本も屹立(きつりつ)していた。

「あ、悪魔……」

葵が呟いたように、その姿は荒々しく、凶々(まがまが)しく、そして美しくもあった。

怪人の足下には、制服姿の中学生が三人、工事現場で使われる黒と黄色のトラロープで縛られていた。

「人質だって？ あの馬鹿……っ」

ぎりりと歯を噛み締めたかと思うや、レラは身を翻(ひるがえ)して自分の荷物を手に取った。

「すみません、今日はここで上がらせてもらいます！」

血相を変えて飛び出すレラを、整理作業員達は呆然と見送った——ただ一人、葵を除いては。

「待ってください！」

「おおおい、葵っ！」

葵は戸惑うギャラさんの体を抱え、その後を追った。地下の整理部屋から外の駐車場に出て、赤い軽自動車に乗り込もうとするレラを見つけた。

「レラさん、何をやる気なんですか？」

追い継(すが)るように葵が訊ねると、レラは厳しい目で答えた。

「決まってる。東久に行ってあいつを止めるんだ」

「あいつって、あの立てこもり犯の黒いノッカーズですか？ 姫吹生さん、まさかあの人と……」

「あんたには関係ない話だ。さあ、下がって」

「イヤですっ、あんな危ないところに行かせる訳にはいきません！」

頑(がん)として阻止しようとする葵に、レラは微かに困惑げな表情を見せた。

「頼むよ、どいてくれ。あたしはどうしても行かなくちゃいけないんだ」

「……それは、警察官として、ですか？」

「それもあ——けど、違う。あたしは大切な友達を助けたいんだ。一人の人間としてね」

レラが真っ直ぐな瞳を向けると、葵は意を決して頷いた。

「わかりました。でも、条件があります。あたしも連れて行ってください」

「何だって？」

レラは眉をひそめた。

「あんた、あそこがどうなってるかわかってるのかい？ とんでもない力を持ったノッカーズが二人もいるんだよ？」

「わかってます。ノッカーズのことなら、よく知ってますから」

決然と言う葵に、レラは降参した。

「……あんたみたいなかわいい子にそんな目をされちゃあ、断るワケにゃいけないね——いいだろ、乗りな」

くいと顎をしゃくり、助手席へと促した。

「ありがとうございます、姫吹生さん！」

「レラでいいよ……ただし、連れていくだけだ。現場に入ることは許さないからね」

「はいっ！」

嬉しそうに返事をし、助手席に乗り込もうとする葵の腕の中からギャラさんが飛び出した。

「車なんてまどろっこしいモンにゃ乗ってられねえっ！」

すたりとアスファルトの上に降り立つと、ギャラさんは膝を曲げて尻を突き出した。黒い表面に四角い穴がばかりと開き、中から小さなロケットエンジンが現れた。

「天猛星(てんもうせい)のギャラクティカ、推(お)して参る！ ギャラクティカスカイハイッ！」

エンジンが火を噴き、黒い球体を空へと打ち上げる。

「ニヤハッ！ ケツがこそばいっ、ニヤハ、ニヤハハハハハハッ！」

勢いよく飛んだのはいいが、先ほどのドリルと同じく無軌道で、ギャラさんの体は駐車場の入り口近くの地面に墜落した。

赤い軽自動車が発進する。運転席から腕が伸び、アスファルトにめり込んだギャラさんの足を掴み上げた。

「あははははっ！ あんた達はホントに面白いやつらだねえ」

笑い涙を浮かべながら、レラはハンドルを切った。

向かう先は東久市の市庁舎——そこに待つ、無二の友人の元へ。

東久市役所では、機動隊の一団が黒燐石の壁の前で立ち往生していた。高さ十メートルを超えた壁ではあるが、決して乗り越えられないものではない。問題は、その先に待つ者だった。

十人の機動隊員が黒燐石の壁を超えて市庁舎に突入しようとしたが、登った端から長い首の怪物に襲われ、傷を負って落下した。幸いにも死者は出ていないが、事件解決の糸口は全く見出せていなかった。

「くそっ、BOOTS(ブーツ)はまだか！」

機動隊の分隊長が苦々しげに言う。

「新宿のノッカーズスラムで何やら不穏な動きがあったらしく、特別警戒中のため到着が遅れるとのことですよ」

「都下(とか)は後回しってことか、ふざけやがって」

車両をがんと殴る分隊長の頭上から影が落ちた。

「な、何だ？」

慌てる機動隊員の前に降り立ったのは、黒いマントを身に着けた人物だった。

「あ、あれは……」

進入禁止のロープの外にいた記者や野次馬から声が上がる。

丸みを帯びた黒いラバースーツを頭から被り、顔を覆う白い仮面の額には、幽霊画で描かれるような三角の布の意匠(いしょう)が施されていた。

「正義の死者、亡装遺体(ぼうそういたい)ネクロマン参上！」

颯爽(さっそう)とポーズを決めて名乗りを上げる。

「おお、クロマンだ！」

「クロマンが来てくれたぞ！」

「いいぞクロマン、東久の星！」

間違っただ名前を連呼され、ネクロマンは折角決めたポーズをがくりと崩す。

「……い、いやあの、クロマンじゃなくてネクロマンだってば……」

弱々しく訂正しようとするネクロマンに、民衆はいっそう大きな声を投げかけた。

「頼む、クロマン！ 犯罪ノッカーズをやっつけてくれ！」

「人質を助けて！ 私の近所の子なのよ、クロマン！」

「おーい、くろまーん！ がんばれー！」

と手を振るのは、二年ほど前にネクロマンが助けた幼い子どもである。

「クーローマンッ、クーローマンッ！」

しまいには間違っただ名の大合唱となり、ネクロマンは訂正をするどころではなくなった。

「ううっ、この応援っ。ヒーローとしては最上の喜びだが……だがっ！」

ジレンマを覚え、ネクロマンは頭を抱えて悶絶した。

ネクロマンとは、二十五年ほど前に放映された特撮番組の主人公だった。初回放送時の「血み

どろ亡者」というタイトルから察せられる通り、すぐに打ち切られたマイナー番組のヒーローのスーツを着ているのは、大散寺(だいさんじ)語(かたる)という青年である。

〔細けえことはいいじゃねえか、語。これだけ応援してもらえる機会なんて滅多にないんだぜ〕
その肩にちょこんと乗ったかわいらしい黒い小鳥が語りかける。

「うう……ダイモン……」

ダイモンと呼ばれたその小鳥は、ネクロマンの相棒である八咫鳥(やたがらす)の血花(ちか)というマスコットに霊が憑依したものである。大散寺語はノッカーズ能力を持たない普通人(ノーマル)で、ネクロマンの力はそのスーツに宿ったダイモンのものだった。

〔そうですよ、部長。それにほら、見てくださいよあのカメラの数。ネクロマンの活躍が全国放送で流れるんですよ〕

耳当ての通信機から発せられたのは、もう一人のパートナーである神楽(かぐら)舞(まい)の声だった。神楽は大散寺語が通っていた東久東(ひがしひさひがし)高校の後輩であり、また彼が部長を務めていた特撮研の部員でもあった。

神楽は離れたところからネクロマンをサポートしている……のだが、冷房のよく利いた自室でコーラを飲みながらネットサーフィンの片手間だということを、語は知らない。

「そうか、そうだよな、神楽くん！」

「そうですよ、部長！」

語はあっさりと気を取り直した。

「よし。行くぞダイモン、とおっ！」

語――ネクロマンが足に力を入れ、地を蹴った。その体が放たれた矢のように飛び、十メートル以上ある黒燿石の壁を軽々と越えた。

「おお、さすがはクロマン！」

「きばれよー！」

声援が背中を押す。

「ありがとう、みなさー」

それに応えようと振り返るネクロマンに、巨大な影が迫った。

長い首が鞭のようにしなり、正義の死者の体を横殴りにする。

ネクロマンは叫び声を上げる暇もなく弾き飛ばされ、石の壁の内側に激突した。

「ゴババババッ！ 何人(ナンピト)タリトモコノ先ニハ立ち入レサセン！」

くぐもった声で言うのは、カミナリ竜――竜脚類(りゅうきゃくるい)によく似た姿の怪物だった。身の丈五メートル強と大型恐竜にしては小振りだが、その代わりに鋼鉄の肌で身を鎧っている。

〔大丈夫か、語？〕

ダイモンが訊ねると、ネクロマンはよろよろと立ち上がった。

「ああ、何とか……しかしすごいパワーだ。体がバラバラになったかと思ったぞ」

〔あいつ、ショベルカーと同化するタイプみたいだな〕

相対するノッカーズを見て、ダイモンはそう判断した。

「ってことは、近くに牛男(うしおとこ)がいるんだな」

〔牛？ 何言ってんだよ語〕

「違うのか？ じゃあ、えっと……超鋼鉄怪獣？」

次々と口に出す特撮ネタに、ダイモンはげんなりとした。

〔言ってる意味がさっぱりわからんが、ここは聞き流すでしょう。さておき、まともに組み合ったら不利だ。動き回って攪乱(かくらん)するぞ〕

「わかった！」

ネクロマンは力強く駆け出した。

横から回り込もうとするネクロマンを、ショベルカーのノッカーズは胴体ごと首を回して攻撃した。

「わはははは！ 当たらんぞっ！」

高笑いを上げながらジグザグに走り、ネクロマンは襲いくる恐竜の頭をかわす。

「とうっ、ネクロパンチ！」

跳躍し、ノッカーズの本体がいると思われる運転席に向け、揃えた両拳を突き出した。

渾身(こんしん)の一撃だったが、強靱な装甲の前では意味を成さなかった。

「コノ削岩獣(サクガンジュウ)サマニ、ソナモン効クカヨッ！」

「なにっ？」

パンチを弾かれ、驚愕するネクロマンへとノッカーズは首を振った。

「うわあっ！」

再び石の壁に激突する寸前、ネクロマンは慣性の力に逆らわずにトンボを切り、軽やかに壁の上に着地した。

〔そう何度もやられるかってんだ！〕

ダイモンが見栄を切る。それに負けじと、ネクロマンはノッカーズを指差した。

「ショベルカーのノッカーズ、汝の正体見たり！ 前世魔人的には……ええと……そうだ、花咲かじいさんだ！」

〔ここほれワンワン、って言いたいのか？ それはちと苦しいぞ……〕

ダイモンは冷やかな視線を向ける。

「え、ええい、細かいことにはこだわらない！ ここは全力でいくぞ！」

〔あれを使うんだな？〕

「おうとも！ 来おいっ、レーザーチェーンソー！」

ネクロマンが片手を天に掲げた。

レーザーチェーンソー——それはネクロマン必殺の武器である。一見ただのチェーンソーであるが、刀身に〈テキサス魂(だまし魂)〉と刻まれたその武器は一言で言い表せないわくにより意思を持ち、ネクロマンの呼ばいに答えてビヨンビヨンと跳ねながらやってくるのである。

「……………あれ？」

だが、待てど暮らせどそれらしき物は現れない。ポーズを決めたネクロマンに、空(むな)しい風が吹いた。

「そういや、エンジンのかかりが悪いからって、分解してキャブレターの修理をしてたんじゃなかったか？」

その作業の最中に事件を聞き、語とダイモンは組み立て直す暇なく飛び出してきたのだった。

「あああっ、しまったあっ！」

頭を抱えて狼狽(ろうばい)するネクロマンに、削岩獣の首が伸びる。

「ぬおっ」

ネクロマンは慌てて跳んだ。

受け身を取り、ごろごろと転がりながら体勢を整え、ネクロマンは驚愕した。

壁に削岩獣の牙が突き刺さり、ガリガリと深く削り取る。

「あの硬い石を、まるで砂糖細工みたいに……」

ぎゅるぎゅるとキャタピラが逆回転し、旋回してネクロマンへと向き直った。

「次ハ外サンゾ」

削岩獣はのそりと鎌首をもたげ、狙いをネクロマンへと定めた。

「ならば奥の手、中国で身に着けたあの秘拳で――」

〔あれはやめとけ、語。一発食らっただけで多分死ぬぞ〕

ダイモンが冷静にツッコミを入れる。

「そ、そうだな……」

ざらりと光る牙を見て、ネクロマンは考えを改めた。

そんなやり取りに構わず、削岩獣はキャタピラをアスファルトに食い込ませながら突進した。

「くっ、万事休すか」

決め手を欠いたままの戦いに脂汗(あぶらあせ)を滲(にじ)ませながら、しかしネクロマンは逃げる素振りを見せようとはしなかった。

ネクロマンと削岩獣の死闘が繰り広げられている中、進入禁止のロープを越えて市役所に近づく者達がいた。姫吹生レラと横山葵、そしてギャラさんである。

「お、おい、関係者以外は入っちゃいかん！」

何も言わずに勝手に入ってきた女を、機動隊員が止めようとした。

「関係者よ。それどころか専門家」

レラは機動隊員に向けて黒い手帳を開いた。

「そ、それは……」

「文句ないだろ？ 通してもらおうよ」

目を剥く機動隊員を押し退(の)け、レラは黒燿石の壁の前に進んだ。

「誰だ、おまえは？」

機動隊の分隊長がじろりと睨み付ける。

「BOOTS(ブーツ)練馬支部所属の姫吹生です」

再び掲げた手帳には、盾の上にブーツを重ねたデザインの紋章があった。

「BOOTS(ブーツ)? おまえ一人だけだと？」

分隊長が不機嫌そうになったのも無理はない。待ちに待った対ノッカーズ部隊がたった一人である上、銃器やノッカーズ用の特殊装備も持っていない。唯一、腰に土建業の職人が着けるようなベルトを下げ、そこから二本のナイフらしき柄(え)が覗いていた。

「それに、何だその子どもとおかしな物体は？」

葵とギャラさんを見て、分隊長は眉をしかめた。

「彼女は協力者、その黒いのは新型装備の試作品です」

しれっと嘘を吐き、レラは分隊長をかわして石の壁を見上げた。壁の向こう側から喧噪が聞こえる。

「もたもたしてる暇はなさそうだね」

そう言うと、レラは腰のベルトに手を回し、柄の一本を握る。引き抜いたのはナイフではなかった。

「い、移植(いしょく)ゴテだと？」

分隊長が声を裏返す。レラが手にしたのは、園芸で使うような小さなショベルだった。

「きさま、ふざけているのか！」

怒りを露(あら)わにする分隊長を無視し、レラは黒燿石の壁のあちこちをしげしげと眺めた。

「なあ葵。あいつ何をやらかすつもりなんだ？」

「さあ……」

(あの道具を使ってクライミングのようによじ登るつもりなのかしら)

葵はそう思い、レラの持つ移植ゴテを見た。よく見覚えのある形だが、そこらのホームセンターで売っている物のように赤や青の塗料で塗りたくられてはおらず、鉄の肌が剥き出しだった。

それもただの鉄ではない。刀の刃紋をさらに複雑にしたような木目状の鋼(はがね)だった。

「……ん、わかった。まずはここか」

そう言うなり、レラは黒い石の壁に移植ゴテの先を押し当てた。

「この壁を壊すつもりか？」

機動隊も銃火器を用いての壁の破碎を考えはしたが、跳弾(ちょうだん)の危険性を考慮して控えていた。

「気でも触(ふ)れたか、そんな物で——」

分隊長が鼻で笑おうとしたそのとき、ポゴンという破裂音が立って石の壁に拳大の窪(くぼ)みが生まれた。

「何っ？」

驚く機動隊員達を尻目に、レラは石の表面に視線を這わせた。

「次はここと、ここだ」

レラが移植ゴテを振るう度、滑らかな表面がぼこぼここと碎けていく。

「掘(ディグ)るなら俺の方が上手(うわて)だっ！」

唐突にライバル心を燃やしたギャラさんが、隣の壁へと駆け出した。

「ギャラクティカメテオスパイラルッ！」

ギャラさんの右手がドリルに変じ、唸りを上げて石に激突する……が、威勢とは裏腹に傷一つ付けられず、それどころかドリルの方がボロボロになってしまった。

「な、なんてこった……こっちは嘆きの壁だったか。太陽の光がなけりゃあとても碎けねえ」

ギャラさんは愕然とし、がくりと地に膝を着いた。ちなみにその真上では、雲一つない青空に太陽が燦々(さんさん)と輝いてる。

それを見て、レラは微笑を浮かべた。

「やたらめったらにやってもダメさ。コツってやつがあるんだ」

そう言う通り、レラは闇雲に石を砕いているのではなかった。

「どんなに硬い物にも弱い点はある。あたしはそこを探してるのさ」

これまでの作業は、そこを剥き出しにするためのものだったのである。

「そう、これは掘る(ティグ)じゃなくて——」

レラの目が、石の壁の最も弱い点を見出した。

「発掘(エクスカベーション)さ！」

移植ゴテがその一点を突く。一拍置いて黒燿石の壁に亀裂が走り、粉々に碎け散ってしまった。

「さてと、行きますか。葵ちゃん、そっから先は入っちゃダメだからね」

「はい。レラさん、気を付けてくださいね」

レラはにこりと笑って親指を立て、そして市庁舎へと駆け出した。

「くうう、遅れを取ってたまるか！ 俺は越える、この嘆きの壁をっ！ ギャラクティカスカイハイ！」

ギャラさんはロケットを噴射させる。

「ニヤハッ、ニヤハハハハ！」

「邪魔しなければいいけど……」

心配げな葵をよそに、ギャラさんは無軌道に飛びながら壁の向こうに消えていった。

「ネクロッ、ナイフッ！」

ネクロマンは懐から〈スタブ魂〉と刻まれたナイフを取り出した。

怒濤(どとう)のような削岩獣の猛攻を紙一重でかわしながら、その装甲に刃を走らせる。パンチと違って通用したが、それでも毛ほどのかすり傷しか負わせられない。

「一点に集中させればっ」

しかし削岩獣は見かけによらない俊敏さを発揮し、なかなか狙いを定めさせない。削岩獣は巧妙に立ち回り、ネクロマンを黒燿石の壁際まで追い詰めた。

「くっ……」

身構えるネクロマンの耳に、ゴンという音がネクロマンの耳に届いた。すぐさま背後の壁に亀裂が生じ、そして砕け散った。

「い、一体何が起こった？」

戸惑うネクロマンの脇を何者かがすり抜けた。

「そいつの相手は任せたよ」

と言うのは、姫吹生レラである。

「え、えっ？」

「行カセネエッ！」

見たこともない女の乱入に戸惑うネクロマンに構わず、削岩獣は市庁舎へと駆け出すレラへと牙を剥いた。対ノッカーズ特殊部隊の一員とはいえ、レラは生身の人間——普通人(ノーマル)である。ノッカーズ能力のあるネクロマンと違い、一撃を受けただけでも致命傷となる。

だが、レラは臆することなく視界の認識範囲を広げた。すると、即座に市庁舎への最短ルートが導かれる。それは単なる道ではなく、削岩獣の動きをも含めたものだった。

レラは走る勢いを殺さず、最小の動きで削岩獣の攻撃を避けていく。

「止マレ、止マレエエッ！」

脇を抜かれ、焦燥に駆られた削岩獣はキャタピラを回転させてレラを轢(ひ)こうとした。

ガゴン、と耳障りな音が立ち、キャタピラの動きが止まった。

「何ダトオッ？」

キャタピラの駆動部に異物——黒燿石の破片が挟まっていた。横を通り過ぎる際、レラが投げ込んでいたのである。

〔うまいぞ、あの女〕

ダイモンが感心する。

「そうか、ああやって動きを封じれば」

ネクロマンはすぐに足下の破片を手に取り、削岩獣を回り込んでキャタピラの間隙に投げ込んだ。

「キサマ、邪魔スルナッ！」

とネクロマンに気を逸(そ)らしている内に、レラは市庁舎の中へと入っていった。

「よし、第二ラウンド開始だ。ネクロ爆弾パンチッ！」

殴りかかろうとしたネクロマンへと、空から落下してくる物体があった。

「ニヤハハハハッ！」

見もだえしながら飛来した物体が、ネクロマンの後頭部に直撃する。

「おぶっ！」

ネクロマンは無様に転び、ずざざとアスファルトを滑った。

〔何だ何だ？ もう一人のノッカーズの攻撃か！〕

ダイモンがぶつかった物体を見やる。それは短い手足を生やした物体だった。

「あいてて……」

ぽっこりと膨らんだタンコブをさすりながらネクロマンの背で身を起こしたのは、額に太い稲妻マークのあるバツテン顔の黒い球体——ギャラさんだった。

〔こいつは確か、ギャラさんとかいう……〕

「東久の平和を脅かす犯罪ノッカーズの首級(しゅきゅう)、この天元突破ギャラクティカが討ち取ったり！」

ギャラさんはネクロマンの頭を踏みつけて勝ち名乗りを上げた。

「……ち、違う違う。犯罪ノッカーズはあっち」

頭を踏まれたままネクロマンが腕を上げ、削岩獣を指差した。

「何と？ ってこたあ俺が足蹴(あしげ)にしているのは誰(た)そ彼(かれ)？」

ギャラさんはたらたらと脂汗を流しながら、おそろおそろ足の下の人物を窺おうとした。

「いつまで人の上に乗っとるかあっ！」

がばりとネクロマンが起き上がり、ギャラさんはひっくり返った。

「お、おお。おめえは性戯(せいぎ)の指者(ししゃ)・寝食満(ねくろまん)じゃねえか」

「……………おかしな変換ミスをしないで欲しいな」

ネクロマンの憤りは一瞬で萎れ、がくりと肩を落とす。

「儂(ワシ)ヲ無視シテ、遊ンデンジャネエッ！」

怒り心頭に削岩獣が吼(ほ)える。キャタピラに挟まった石がばりばりと砕けた。

削岩獣の姿がより凶悪に変わる。頭部の両側面に虫のような複眼(ふくがん)が浮かび、三本の鉄の角が生えた。

「モウ許サネエ……グチャミソにスリ潰(ツブ)シテ埋(ウ)メテヤルッ！」

複眼を真っ赤に染めて、削岩獣が凄む。

だが、正義のノッカーズはそれに動じなかった。

「甚(はなは)だ不本意だが、ここは一つ手を組むとしようぜ」

ギャラさんはぱちりと指を鳴らして不敵な笑みを浮かべた。

「了解。プロメテウス大戦振り——いや、春日部(かすかべ)の騒ぎ以来の共闘になるな」

ネクロマンは漆黒のマントを翻し、ナイフを構えた。

「お先に行かせてもらうぜ、寝食満(ねくろまん)！」

「.....そこは直してくれないのね、とほほ」

ナイフを落としかけながら、ネクロマンは猛然と駆け出すギャラさんに続いた。

市庁舎に突入したレラは、足を止めずに階段を駆け昇った。七階建ての各フロアには、市の職員や利用に訪れた市民が黒耀石の柱に埋め込まれていた。みな顔は出ており、呼吸はできるようだが、散見される老人や妊婦のことを考えると悠長にははいられない。

「つくづく馬鹿だね、あいつは！」

歯噛みをするレラの顔は、憤りと哀しみの入り交じった表情だった。

昇降口のドアを蹴破り、屋上に出たレラの視界が黒く染まる。

黒い腕――その先端から伸びる黒い爪が襲いかかってきた。

「くっ！」

とっさに特別製の移植ゴテを前に出すと、ガラスの擦(す)れたような音と強い衝撃が走った。

レラはもう一本の移植ゴテも引き抜き、両腕を振るって黒い猛攻を凌ぐ。

生来の直感と洞察眼を駆使して相手の攻め手を見切り、少しずつ押し返していく。

レラは二本の移植ゴテを下方で交差させた。

「てええりゃあぁっ！」

黒い影の腕をかち上げ、そのまま黒い腹を蹴りつける。

「ルバオオウッ！」

吼えながら後方へ跳ぶのは、ニュースで映し出されていた黒耀石の皮膚を持つノッカーズだった。

鳩尾(みぞおち)をまともに蹴られたが、いかんせん普通人(ノーマル)の攻撃である。

黒いノッカーズはさしたる痛苦を感じる様子もなく、ひらりと着地した。

「ルバオオオオオオオオオオオンッ！」

悔しさに腹を立てたのか、ノッカーズは雄叫びを上げた。

「ふん」

それを見て、レラは鼻で笑った。

「ケダモノの真似なんてやめなよ。白々しいったらありゃしない」

レラはつかつかと屋上を歩き、黒いノッカーズと真正面から対峙した。

「あたしを忘れたとは言わせないよ、御影」

名を呼ばれ、黒いノッカーズは微(かす)かに惑い、そして体から力を抜いた。

悪魔のような顔の下半分を覆う黒耀石が剥がれ、生身の口が露わとなった。

「姫吹生……日本に帰って来ているとは聞いていたが、まさかこんなところに出しゃばるとはな」

そう語るのは御影章兵――この東久市で古山遺跡調査団の主任代理を任せられた男であり、また姫吹生レラと大学で机を並べた友人であった。

「こっちにも色々と都合があってね。御影……元気そうな姿を見られたのは嬉しいけど、これはとても喜べるような状況じゃないねえ」

レラは眼下に広がる市庁舎の惨状に目をやった。

「そう言うな、姫吹生。六年振りの再会だ、積もる話もたくさんある」

「話……ね。いいだろう、何の話がしたい？」

「ネタはおまえの方があるだろ？ 教えてくれよ、大学院を辞めた後のことを。大陸に渡ったらしいじゃないか」

御影は粘着的な口調で語りかける。

大学の同期だった姫吹生レラと御影章兵は、共に大学院の博士課程前期——つまり修士課程に進学した。御影は旧石器時代、レラは縄文時代を専門としていたのだが、レラは入学して三ヶ月も経たない内に大学院を自主退学した。レラは誰に相談もせず退学届を出し、誰に相談することもなくユーラシア大陸放浪の旅に出たのである。

「しばらく会わない間に、随分と嫌みったらしくなったもんだね……そうさ。あたしは四年かけて大陸のあちこちを巡った。あたしがやりたいことが何なのかを探して、ね」

「自分探しの旅か。ふっ、意外だな。おまえにそんなナイーブなところがあったとは」

「あらそう？ こう見えても乙女だもんでね」

移植ゴテを持つ右手の親指で自分を指差した。

「ほう。それは……もしや、ダマスカス鋼(こう)か」

御影の目に研究者としての光が浮かんだ。

ダマスカス鋼とは、中東に古くから伝わる合金である。様々な金属の組み合わせから独特の模様を表すだけでなく、硬度と柔軟性を兼ね備えたその鋼は、主に刀剣の材料として用いられていた。しかしその製法は二百年も昔に失伝し、現代の技術をもってしても再現は不可能だと言われている。

「いいだろ？ ダマスカス・トロウエルってんだ。ダマスカス鋼(こいつ)を扱える鍛冶屋のおいちゃんちょっとした縁(えん)があってね。特別に拵(こしら)えてもらったんだよ」

自慢げに言うが、心から打ち解けているのではない。レラは御影の挙動を観察し、その目に浮かんだ探求心の光も見逃してはいなかった。

「確かに珍しい物ではあるが……要(い)らんよ。俺には他の誰にもない力があるからな」

御影が腕を持ち上げると、掌から黒耀石の石柱が生えた。

「力ねえ……ふん。あたしの知ってる御影章兵は、力を恐れることはあってもそれをひけらかすような男じゃなかったんだがね」

「人は変わるものさ。そうだろう、姫吹生」

「うんにゃ、違うね。人はそう簡単には変わらないよ。どんな力を持ってたって、どんな人生を歩んだって、大切なものの形は残るもんさ」

「滑稽だな。自分探しなんぞをしたおまえがそれを言うか」

「おかしいことはないよ。あたしは自分ってやつが形が見えてなかったのさ。なまじ目と勘(カン)がいいだけにね」

「お得意の洞察眼か。おまえが時折見せた卓越した観察力……昔は羨(うらや)みもしたが、所詮はこの世界だけのもの。平行世界から寄り集められるノッカーズ能力とは天と地の開きがある」

「それは歪んだ自己主張だよ、御影。でもね、あんたが馬鹿にしたこの目は、あんたの心の葛藤(かっとう)をよく映してくれてるよ」

「何だと？」

「あんたの悩みが手に取るようにわかるよ。大学院でどれだけ研究を続けても、そこから先の就職口がない。大学教員も自治体の専門職も門戸(もんこ)が狭い上、研究の実績はそう重く見てもらえない。それに、不況のせいで文化財行政は財布の口が固く、純粋な研究目的の発掘調査はほとんどない。そもそも、この国の人間はこれまで歩んできた文化や歴史への興味が薄い。考古学を目指す学生の数も質も落ちている……」

レラが並べる言葉を耳にし、御影は齒噛みした。

「……とまあ、こんなところだろ？ 理屈っぽいあんたらしい考えだね。ま、客観性はそれなりにあるけど、やっぱり歪んでるよ。どんだけ理屈でガワを固めても、その中身がないんだ」

「俺の努力が足りない——そう言いたいのか？」

「違うね。あんたが努力家だってことはよっく知ってるさ。それこそあたしなんかとは天と地の差があるよ」

「遠回しに自分が天才であると言っているように聞こえるな」

レラは呆れ、ため息を漏らす。

「まったく、ひがみ根性丸出しだね。話がしたいってんならもっと話す気を見せて欲しいもんだよ」

それを聞き、御影はくつつつと笑った。

「くくく……」

笑いに揺れていた肩が、次第にわなわたと震えていく。

「……おまえに、おまえに俺の何がわかる。その才能にかまけて考古学を馬鹿にしたおまえに、俺の気持ちがわかってたまるか」

打ち震える肩と背中から、黒い石の柱が屹立(きつりつ)する。

「御影……」

胸にちくりとした痛みを覚えつつ、レラは足を踏み出した。

「違う！ 違う違う違うっ！」

差し出された手を拒(こば)むように、御影は首を大きく振った。

「人は変わるんだよ、姫吹生！ 俺はおまえが知っている御影章兵じゃない」

御影の背に生まれた石が切り離された。

「今の俺は——そう、黒燿石を自在に生み出すノッカーズ、オブシディアンだっ！」

言い放つや、宙に浮いた石柱がするどい先端をレラに向けて飛んだ。

レラは反射的に洞察眼を使い、迫り来る十数本の石柱をかわし、また二本のダマスカス・トロウエルで打ち砕いた。

「石器屋(いしや)のあんたらしくないね。ただの石の塊が、このあたしに届くと思ってんのかい？」

挑発すると共に、レラは地を蹴った。

「そうだな。これは野暮なことをしてしまった」

御影——いや、オブシディアンは新たな石を生み出す。

だが、一撃目のようにそのまま放ちはしない。

念を凝らすと、浮かんだ黒い石に不可視(ふかし)の力が加わった。

パキンと乾いた音を立てて黒燿石が割れた。

微細に加えられた力により、表面がペリペリと少しずつ剥がされていく。

ガラス質の鋭い刃(やいば)を残しつつ、強度を維持するための調整が施される。

「ナイフか！」

それは、ナイフ形石器と呼ばれるものだった。

二十にも及ぶ石のナイフがレラを襲う。

「まだまだ、この程度っ！」

意気を発し、レラは次々と飛来する黒いナイフを叩き壊していく。

「それは単なる足止めだ」

オブシディアンは異なる石器を作り上げた。

それはナイフの数倍の大きさで、尖った先端を持つ槍の刃——槍先形尖頭器(ポイント)と呼ばれる石器だった。

三本の槍先(ポイント)に加え、数十の石鏃(せきぞく)が作り出される。

「これならどうだ、姫吹生よ？」

黒い流星群がレラに降り注いだ。

レラはまず、大きな槍先(ポイント)の動きを読み、それを弾いた。

だが、その隙を小さな鏃(やじり)が突く。

「くっ——」

レラは身をひねってかわす。

直撃は免れたものの、五つの鏃がレラの服と肌を斬り裂いた。

動きが鈍り、とうとう黒い刃に捉えられた。

「うぐっ！」

刃が右手の甲に突き刺さり、レラはダマスカス・トロウエルを落とした。

それに気を取られたレラへ、十数の石鏃が牙が剥いた。

「——っ！」

声にならない嗚咽を漏らしてよろめく。

「おっと。女性の体にそんな物騒な物を残しておくのはよくないな。失礼失礼」

オブシディアンがくいと指を引くと、レラに刺さった刃の全てが引き抜かれた。

全身から鮮血が吹き出す。

「ぐああああっ！」

悶絶しながらも、レラはその痛みをこらえた。

足を踏ん張り、きつとオブシディアンを睨み返す。

「ま、まだだ……まだだよ、御影」

「違うと言っただろ。俺はオブシディアンだ」

一際(ひときわ)大きな槍先(ポイント)を作り、とどめを刺そうとした。

そのとき、ブツブツと縄の切れる微かな音がオブシディアンの耳朶(じだ)を揺らした。

「む？」

槍先(ポイント)を宙に維持したまま音の出所を見やると、人質に取っていた三人の中学生を縛るトラロープが切断されていた。

「誰だっ！」

異常を察知するや放った槍先は、気を失ったままの中学生達の寸前で二つに割れた。

そこには誰もいない。

だが、ノッカーズ能力を發揮し、鋭敏となった知覚は確かに人の気配を感じていた。

オブシディアンは続け様に石鏃の群を飛ばす。

大半が砕かれたが、一つだけがその体を掠(かす)った。

気配のある空間にノイズが生じ、人影が現れた。

「ノッカーズ？ いや、そうではない。きさまBOOTS(ブーツ)か！」

「いかにも。BOOTS(ブーツ)室長兼練馬支部長、桐生(きりゅう)吾郎(ごろう)だ」

そう名乗った男は、青みがかったプロテクターの付いた黒いラバーシューズを身に着けていた。これはBOOTS(ブーツ)の誇る対ノッカーズ用特殊装備・BOOSTER(ブースター)——オルタレーション・バースト以後、年々増加・凶悪化するノッカーズ犯罪を強攻的に鎮圧するための、選ばれた者だけが装着できる武装である。

「ステルスシステムが損傷したか」

BOOSTER(ブースター)は装着者によって細部の形状と能力が異なり、桐生の物は右腕に長い一本爪のような鋭いブレードを持ち、そして光学や熱学をはじめとするあらゆるセンサーを遮断するステルスシステムを備えている。

「だが、人質は解放した」

桐生はエリート集団BOOTS(ブーツ)の中でもさらに選(よ)り抜きであり、ドイツのGSG-9(ゲー・エス・ゲー・ノイン)での研修を経て、異例の若さで室長に抜擢された……のであるが、練馬で珍奇な黒い球体——ギャラさんと出会ってからは、直進するはずのエリート街道がぐねぐねと湾曲してしまっている。ギャラさんはその優秀な頭脳をもってしても理解に苦しむ存在であり、桐生は彼の存在を脅威と判じ、ほぼ独断でBOOTS(ブーツ)練馬支部を設立したのだった。

ギャラさんと関わる度、それまでの活躍が嘘のように調子をおかしくしてしまっている桐生だが、それも練馬の内に限った話である。

桐生は敵対ノッカーズの能力を冷静に分析した。

「平行世界から黒耀石を引き寄せる力に加え、レベル2程度の観念動力(サイコキネシス)——そんなところか」

オブシディアンが触れもせずに黒耀石を石器にできたのは、見えない力を的確に扱えたからであった。

「次はおまえが相手か？」

オブシディアンは人質を庇うように立つ桐生へと攻撃を加えようとした。

「いや、おまえの相手は私ではない」

「何だと？」

訝(いぶか)しげに問うオブシディアンの目に、ブレードのない桐生の左手がトランクを握っているのが映った。

「それは――」

「姫吹生くん、これをっ！」

桐生がトランクを放り投げた。

くるくると宙を舞うそれを、レラが全身で受け止める。

「……ありがとうございます、桐生室長」

礼を言うが早いか、レラはトランクに備え付けられたハンドルレバーを握り、回しながら引いた。

ぱかりと開いたその内部には、プロテクターの部品とそれに絡み付く黒い繊維状の物体がぎっしりと詰まっていた。

「まさか、おまえっ――？」

「御影……帰って来てからのあたしが何をしていたか、まだ教えてなかったね」

レラはにやりと笑い、トランクの内部に手を差し出した。

「BOOST(ブースト)ッ！」

その声に呼応するように繊維が蠢(うごめ)き、まるで意思を持つかのようにレラへと伸び、その体を覆っていく。

数秒と経たず、姫吹生レラは黒いスーツに白いプロテクターとフルフェイスのヘルメットに身を包んでいた。

「今のあたしは警察官なのさ」

X(クロス)状のゴーグルの奥で、レラは不敵な笑みを浮かべた。

一方、地上での戦いは混乱を窮(きわ)めていた。

邪悪に変貌した削岩獣の攻撃をすんでのところかわし、ネクロマンは刃の欠けたナイフをしまって拳を振り上げた。

「ネクロ爆弾パンチ！」

拳の弾幕が炸裂する一寸前、ギャラさんの丸い目がきらりと光る。

「先を越されてたまるか！ ギャラクティカダブルスパイラル！」

両腕がドリルへと変じ、火を噴きながら打ち出された。

削岩獣を狙ったつもりだが、二つのドリルはやはり無軌道だった。

カクカクと曲がりながら突き刺さったのは、パンチを放とうとしていたネクロマンの尻の間である。

「うわひゃあっ！」

ごりごりと尻を削られ、ネクロマンは飛び上がった。

「何で邪魔ばかりするんだ、あんたわっ！」

唾を飛ばさんばかりの剣幕で抗議するネクロマンに、ギャラさんは口笛を吹いてごまかそうとした。

「漫オヤッテンジャネエゾッ！」

削岩獣が首を振り、いがみ合う二人を薙(な)ぎ払った。

「うおおうっ」

「ぶぎゃっ」

ネクロマンとギャラさんは重ね合わせとなって地面に叩きつけられる。

「こ、この俺がここまで苦戦を強(し)いられるとは……ちっ、足手まといさえいなけりゃあ……」

「それはこっちのセリフだっ！」

「何だとゴルァ！」

額を付き合わせて睨み合う。

〔同族嫌悪ってやつだな。やれやれ……〕

ダイモンが嘆息する。

折角張った共同戦線も、このように噛み合わず、全く意味を成していなかった。

〔おい、語。装着限界(クランドリミット)を忘れるなよ〕

と、ダイモンが注意する。以前、ネクロマンスーツはノッカーズとの戦いで一度焼失しており、今はその灰を用いた逝灰纏身(せいばいてんしん)を行って変身している。スーツを持ち歩かずに済む分には便利だが、反面で活動に諸々の制限が生まれてしまっていた。

「ああ、わかってるさ」

そうは言ったものの、打つ手はなかった。

「どこかにあるはずだ。あいつの弱点が……」

ネクロマンは削岩獣を観察した。比較的脆(もろ)いと思われる操縦席ですらかなりの強度を持ち、姫吹生が突いたキャタピラの間隙も塞がれてしまっていた。

〔あれだけ硬く守られてたら、マインドネクロシスも届かねえぞ〕

人の心の掬(から)め手を利用するネクロマン最強の必殺技も通用しない。正に八方塞がりである。

「……なあダイモン。あいつはショベルカーと同化してるんだよな？」

〔おう。本人がそう言ってたから間違いねえだろ〕

「ということは、だ。基本的な構造はそれと同じだってことにならないか？」

姿こそ異様だが、移動にはキャタピラを使い、首を横に動かすときには胴体ごと回転させるという削岩獣の動きは、確かにショベルカーのものだった。

〔燃料も同じだ、って言うてえのか？ ガス欠を狙うと？〕

「いや。あれだけ動き回ってるのに、ちっとも鈍った様子を見せてない。燃料も使ってるかもしれないが、たぶんノッカーズ本体からのエネルギーの方が大きいんだろう」

〔じゃあ、やっぱりダメじゃねえか〕

「そうでもないさ。神楽くん！」

ネクロマンは通信装置に呼びかけた。

〔……………〕

だが、自室で待機しているはずのサポート役からの返事はない。

「ど、どうした、神楽くん？ おーい、おーいっ！」

〔……………ぐう〕

微かな寝息が聞こえ、ネクロマンは硬直した。

〔……はっ。す、すいません先輩！ ちょっと野暮用で席を外していました！〕

ネクロマンはその言い訳を素直に信じた。

「そ、そうか、それは良かった。飽きて寝てしまったのかと思ったよ」

〔そそそ、そんなワケないじゃないですかーあはははー〕

「それはさておき、君に頼みたいことがあるんだが」

〔はい、喜んでっ！〕

神楽は飲み屋の店員のような返事をした。

「ショベルカーの構造について調べて欲しい。特に、どこが弱いのかを知りたいんだ」

〔わかりました。すぐにぐぐるのでしばしお待ちを！〕

通信機から滑らかな打鍵音が届く。

「よし、後は神楽くんが調べ終わるまでの時間を稼ぐぞ」

気合いを入れ直し、ネクロマンが身を起こそうとするより早く、ギャラさんが飛び出した。

「その前にこの俺が倒してやる！ ギャラクティカストレンジウィップ！」

ギャラさんの右手がするすると伸びる。

「アード、ギャラクティカアンタレス！」

白い手袋のような右手の先がぱかりと外れ、中から鋭い針が現れた。

「この針には、シロナガスクジラを二回を悶死させるほどの劇薬が仕込まれているっ」

お決まりの如く、針ははちゃめちな軌道を描いて飛ぶ。だが、千載一遇と言うべきか、削岩獣の牙をすりと避けて操縦席を捉えた。

「よっしゃ、これぞ天の配剤！」

ギャラさんはガッツポーズで喜んだが……がいん、と毒針はあっけなく鉄の装甲に弾かれた。

「……………へ？」

針はそのまま宙を飛ぶ。

鋭く光る先端は、ギャラさんに向いていた。

「……おおおっ、おいおいっ！」

慌てて後ずさりしようとしたギャラさんだったが、削岩獣のキャタピラが刻んだ轍(わだち)に足を引っ掛け、ころりと転んでしまった。

かちり、とスイッチを押したような音が体のどこかで立った。途端に、伸びに伸びた右腕がまるで掃除機のコードのように巻き取られる。毒針が踊りながら飛来し、ギャラさんの後頭部に突き刺さった。

「うぎゃあああああぁっ！」

バツェン状の顔があっという間に紫に変色し、ギャラさんはがくりと力を失った。

[何やってんだか……]

ダイモンが今日何度目になったかわからない深いため息をついた。

[――先輩っ、わかりましたっ！]

通信機から興奮した神楽の声が響く。

「そうか。でかしたぞ、神楽くん！ んで、弱点は？」

[集合知(ネット)によると、ショベルカーは油圧を利用して大きな力を出すそうです。つまり、その力を生み出す油圧シリンダーを壊せば、少なくとも攻撃力は半減するはずです！]

ネクロマンは削岩獣を見た。長い首の頸椎(けいつい)に当たる場所で、金属棒がピストン運動している。

「油圧シリンダー……あれか！」

ネクロマンは脱兎の如く飛び出し、懐に手を入れた。

「ネクロナイフじゃ遠過ぎる――ならばっ！」

取り出したのはブーメランだった。

「ネクメランッ！」

それを人差し指と中指で挟み、ありったけの力を込めて投げる。

「ああっ、そいつは俺のお家芸！」

いつの間にか毒から回復していたギャラさんが悔しげに叫ぶ。

「一人勝ちは許さねえっ！」

鈍角に曲げられたギャラさんの右腕が硬くなる。

「乾坤一擲(けんこんいってき)、ギャラクティカスライハーケン！」

放たれたもう一つのブーメランは、ネクメランの後を追うように曲線的な軌道で飛んだ。

「あああっ、またかっ！」

今までことごとく失敗したことを思い出し、ネクロマンは死人のように蒼白となった。
だが、ギャラさんは違った。

「見よ、神すらも嫉妬するこの力！」

その目に勝利の希望と功名への欲望を浮かばせながら跳躍する。

空中で左手と両足を大きく開くと、額の電撃マークが究極を意味するΩ(オメガ)の形に変化した

。

「ギャラクティカゴッドジェラシー！」

ギャラさんの全身から目映い光が放出される。

その背後で、果てしない闘争を繰り広げていた光明神(アフラ・マズダ)と暗黒神(アーリマン)が妬(ねた)ましげに親指の爪を噛んだ。

ギャラクティカゴッドジェラシー——それは神をも凌駕する奇跡を引き起こす技である。ときに数万光年離れた惑星を消失させ、ときに時間の流れを巻き戻す……のだが、ご多分に漏れず、その奇跡のほとんどはギャラさんと無関係の場所で起こるか、もしくは都合の悪いものであった

。

ギャラさんの放つ光が薄れ、何事もなかったかのようにスライハーケンはネクメランに近付いていく。

〔不発、か……〕

ダイモンが声に苦渋を滲ませた。

「——いや、違う。そうじゃないっ！」

ネクロマンが見開いた目の先で、二つのブーメランが上下に重なった。

軌道だけでなく回転までもが同調し、大気を掻き分ける。

「サセルカヨッ！」

甘く見ていた削岩獣がようやく取った挙動は遅かった。

回転する二つの刃が、金属製のシリンダーを断ち切る。

「よっしゃあっ！」

飛び上がって喜ぶギャラさんの脇からネクロマンが駆け出した。

「コノ程度ノ傷デ、勝ッタト思ウナヨッ！」

削岩獣が胴を回し、長い首を振り下ろそうとした。

「何ィッ？」

狼狽の声と同時に、油圧シリンダーがぼきりと折れた。油を迸(ほとばし)らせ、削岩獣の首は動きを止める。

「うおおっ！」

ネクロマンは削岩獣の懐に入り、その首を抱える。

渾身の力を込め、恐竜ほどもある巨体を持ち上げた。

「ネクロ二段投げえっ！」

叫びながら腰を跳ね上げる。

「お、おおっ？」

一本背負いが決まる先には、狂喜するギャラさんが立っていた。

「おいおいおいってばよー」

ずどん、と削岩獣が背中から落ち、ギャラさんごとアスファルトを砕く。

その衝撃に操縦席の装甲が壊れた。

「う、ううう……」

よろよると中から這い出てきたのは、豆絞りを巻いた小柄な老人――上屋だった。

強大な力を振るっていたときの凶悪さはなく、それどころか目には怯えた色が浮かんでいた。

その眼前に、ネクロマンが立つ。

「おまえが削岩獣の本体か。神妙にお縄を頂戴しろ」

「ひいっ。わ……僕は、あいつに脅されただけなんじゃあ……」

上屋が指を差したのは、市庁舎の屋上だった。

「あいつ？」

ネクロマンがそちらに目を向けたそのとき、屋上で黒い光が弾け、そして大きな爆発が起こった。

「後は任せたぞ、姫吹生くん」

そう言い残し、人質だった三人の中学生を抱えて屋上から飛び降りる桐生を見送り、レラはオブシディアンと向き合った。

「姫吹生……おまえがBOOTS(ブーツ)だったとはな」

なぜか嬉しげに、オブシディアンは言った。

「と言っても、練馬支部で実地研修中の身だけどね」

レラは笑ってそれを受け流した。

BOOSTER(ブースター)装着時には身体能力が飛躍的に上昇する。先ほど受けた傷は癒えていないが、身を覆うスーツにより出血は抑えられていた。

「くくく。これで対等——などと思ってはいまいな？」

「思っていないよ。今のあんたが相手なら、あたしの方が上だからね」

レラは落とした二本のダマスカス・トロウエルを拾い上げ、右は顺手(じゅんて)に、左は逆手(さかて)に持って構えた。

「言ってくれるな。大口を叩けるのは今の内だぞ」

黒い石器が生み出される。

五つの槍先(ポイント)、十のナイフ、三十の鍔が飛んだ。

「あんたこそ、いつまでも調子に乗っていると足下すくわれるよ」

代わる代わる襲いかかる黒い刃の流星を、レラは二本のトロウエルで軽々と叩き壊していく。

最後の槍先(ポイント)を両断し、レラは駆け出した。

「むっ！」

オブシディアンが次の手を打とうとするより遙かに早くその懐に入り、その喉元で刃を交差させた。

「こんな風に……ね」

少し力を加えれば、相手の命を断つことができる。

間違いのない勝利であるが、レラは刃をそれ以上先にはやらなかった。

「……………やーめたっ」と

レラはダマスカス・トロウエルを引き、くるりと回して腰の鞘に納めた。

「こんな風に勝っても、意味はないからね」

「俺などに勝っても嬉しくない、と言いたいのか？」

オブシディアンが絞り出した言葉には、屈辱を受けた怒りが滲んでいた。

「んなこと言っていないだろ？ ったく、自分に素直じゃないと人の言葉も曲がって聴こえちまうのかね」

はあ、とレラは息を吐いた。

「あたしが言いたいのはさ。能力だの武器だのじゃなくて、人間らしくこっちで決着つけようっ

てことだよ」

レラはぐっと拳を握る。それは大学に入る前にボクシングをやっていたオブシディアン——御影章兵への彼女なりのメッセージだった。

だが、それは届かない。

「ふざけるなよ……姫吹生っ！」

足下から黒燿石の柱が立ち上がる。

レラは後ろへ跳んでそれをかわした。

「俺は、俺にしかないこの力できさまを倒す。そしてこの国の行政を、社会を変えるっ！」

オブシディアンは屋上に張られた転落防止用のフェンスに手を伸ばし、支柱を力任せに引き抜いた。観念動力(サイコキネシス)を発揮して網を取り払い、柱の両側面に黒い爪を走らせる。

「ただの棒というのも芸がないからな」

アスファルトから伸びた石柱が砕けた。人の頭大の塊が残り、それが水平面で二つに割れる。つるりとした断面に見えない力が加えられ、薄く細長い剥片(はくへん)が削り出されていった。

「……細石刃(さいせきじん)か」

それはただの剥片ではない。ナイフ形石器や槍先形尖頭器(ポイント)といった石器製作技術が到達した一つの境地であった。

オブシディアンが支柱を掲げると、その先端と両側面に刻まれた溝に黒い剥片がはまっていく。

「これならば、おまえの刃にも負けん」

オブシディアンは黒い刃の槍を構えた。

「やれやれだね」

レラは腰に納めたダマスカス・トロウエルではなく、背中へと手を回した。

背にはバックが装着されており、その四隅(よすみ)から平たい蛇腹のコードがX(クロス)状に伸びていた。バックバックにはさらにスペード形の金属板と三本の太い筒が備え付けられており、筒の一本の端に三角の把手がある。レラがそれを握って引くと、三本の筒とスペードの板は直線的に一つなぎとなる。

「トロウエル(移植ゴテ)の次は円匙(えんぴ)か。悪い冗談だな」

土木作業で穴を掘るための道具・円匙——それは遺跡の発掘でも用いられる物でもあった。

桐生のBOOSTER(ブースター)のブレードに当たるレラだけの特別装備であり、スペード状の刃先はトロウエルと同じくダマスカス鋼でできていた。

「ダマスカス・ショベルという訳か」

「ざーんねん。もうちょっとひねってるよ。名付けて——ダマスカス・エクスカベーターさ」

レラは右手で把手を握り、左手を柄に添えた。

「発掘(エクスカベート)してやろうじゃないか、本当のあんたってヤツを！」

「ぬかせ！」

怒号と共に、両者は刃を交(まじ)えた。

同じ長柄(ながえ)の武器ではあるが、間合いは槍の方が長い。

突きのような直線運動においても槍が有利だが、払うような曲線運動では槌子(てこ)の原理を用いる円匙に軍配が上がり、また込められる力も上回っている。

オブシディアンは腕力に観念動力(サイコキネシス)を加えて槍を振るい、間合いを詰めようとするレラを阻んだ。

一進一退の攻防であった。

強度に勝るダマスカス・エクスカベーターが黒燐石の刃を砕く。

だが、刃こぼれする端から新たな細石刃が生み出され、柄に補充されていった。

「ええい、まだるっこしい！」

痺れを切らしたレラが捨て身の攻撃を仕掛けた。

エクスカベーターで槍をすくい上げ、踏み出した右足を軸に横回転をする。

「何っ？」

戸惑いの声を上げたのは、回転運動中のレラだった。

横腹を薙がんとするその一撃を前に、オブシディアンはなぜか槍を握る手を離したのである。

「構うもんか。ぶん殴るっ！」

言葉とは真逆に、レラはエクスカベーターを捻(ね)じり、鋭利な側面ではなく平らな腹を叩きつけようとした。半ば無意識の手加減ではあるが、それが明暗を分けた。

オブシディアンはにやりと口の端を吊り上げた。

「かかったな、姫吹生」

その左手には小指の先ほどの黒燐石が浮いていた。

レラは見た——その塊の輪郭(りんかく)がゆらゆらと揺れているのを。

転瞬、黒い閃光が広がり、続いて凄まじい衝撃がレラを襲った。

「うぐああああああああああっ！」

レラの体は大きく弾き飛ばされ、昇降口の壁に激突した。

壁に亀裂が生じ、レラの頭部を覆うヘルメットがX(クロス)字のゴーグルごと砕け散る。

「あ——かはっ」

ずるずると壁からずり落ちる。スーツやプロテクターもところどころ破損したが、そのお陰でレラの五体はバラバラにならずに済んでいた。

「とはいえ……ぐ……」

必死に気を保(たも)とうとするレラの胸に重い痛みが走った。

「肋骨(アバラ)が……半分イカれたか」

痛みをこらえながら顔を上げるレラに、オブシディアンが歩み寄る。

「見たかよ、姫吹生。これが俺の力だ」

膝を着くレラを見下ろしながら、オブシディアンは右手を開いた。

掌の中に、再び小さな黒燐石が現れる——その輪郭は定まっていない。

「何をしたかわかるか？ これは平行世界から引き寄せせる途中の黒燐石だ。このまま安定させれば単なる石に過ぎない。だがな、姫吹生。おれは発見したんだよ。完全に引き寄せせる前に観念動力(サイコキネシス)を加え、故意に安定しないようにすれば……」

オブシディアンは腕を振り、黒燐石を空に投げた。

空中で石が定まった形を取り、そして一瞬で砕けるのが見えた。

砕けながら黒い閃光を発生し、そして激しい爆発が起こる。

「こうなることをな。くく、ノッカーズ能力は素晴らしいぞ。認識だ、全ては認識なんだよ、姫吹生。平行世界の己を認識し、与えられた力の何たるかを認識する。そうすることで力をいくらでも大きくすることができる」

オブシディアンの六つの赤い目がぎらぎらと光る。それは力に溺(おぼ)れ、目を眩(くら)ませ、己を見失った者の目だった。

「このカー—〈煙る鏡(テスカトリポカ)〉と呼ぶことにしよう」

〈煙る鏡(テスカトリポカ)〉とは、アステカ文明における神の一柱(はしら)であり、その意は黒く滑らかな黒燐石を表している。

「だが、これだけは使いたくはなかった。余りにも大きい力だからな。だから俺は上屋—削岩獣を引き込み、そして人質を取った。なるべく穏便に事を運ぶためにな」

レラは忌々しげに顔を歪め、オブシディアンの顔へ唾を吐きかけた。

「黙って聞いてりゃくだらないゴタク並べやがって。そんなモンは力なんかじゃない。何度でも言うよ—自分のことがわからないヤツが振るう力なんて力じゃない。そんなモン、あたしは絶対認めない！」

オブシディアンは顔に付いた唾を拭い、含み笑いを漏らした。

「言いたいことはそれだけか？ くく、最期の言葉まで勇ましいな」

オブシディアンの右手に握り拳ほどの〈煙る鏡(テスカトリポカ)〉が生まれる。

それは、押し量(はかる)だに恐ろしい威力を持つ爆弾だった。

「姫吹生レラ。くだらない行政(システム)の象徴と共に—死ね」

〈煙る鏡(テスカトリポカ)〉を放とうとしたそのときである。

「そうはさせん！」

屋上の外壁からフェンスを飛び越え、二つの陰が現れた。

太陽を背にしたその影は、黒い怪鳥と黒い球体—現れたのはネクロマンとギャラさんだった

。

「おまえの非道もここまでだ！」

「天誅を下すぞゴルァッ！」

二人のヒーローは、そのままオブシディアンの頭上へと飛びかかる。

「有象無象がわらわらとっ！」

オブシディアンはレラに向けていた右手を二人に翳(かざ)した。

〈煙る鏡(テスカトリポカ)〉がその手から離れ、黒い閃光を発生した。

不安定状態を維持していた観念動力(テレキネシス)が変化し、閃光とそれに続く爆発に指向性を持たせる。

跳躍中のネクロマンとギャラさんは、断末魔を上げる間もなく破壊エネルギーに呑まれた。

「ゴミ屑が。あれも俺と同じノッカーズだと思えば虫酸(むしず)が走るな」

二人が影も形も残さず消えたことを確かめ、オブシディアンは嘲(あざけ)りの笑いを漏らす。

「ガルバニック・チャージ！」

背後から咆哮(ほうこう)の如き声が発された。

「何だっ？」

反射的に振り返り、オブシディアンは目を瞠(みは)った。

声の主――レラの背面から伸びる四本の平たいコードの先が、胸と腹を守るプロテクターの穴に差し込まれた。

バチバチと電撃が弾けるや、右手に握られていたダマスカス・エクスカベーターが形状を変えていく。

エクスカベーターの柄がレラの右腕と同化し、ダマスカス鋼の刃先が手の甲へと折り畳まれた。

レラは自由な左手を後ろ腰に回す。腰部パックに収納されていた弾頭を取り出し、それを即座に右手首の内側に装填(そうてん)した。

ガルバニック・チャージとは、BOOSTERの能力を最大限に発揮した状態である。その形態はやはり装着者によって異なり、腕を刃や銃火器、ドリルに変える者などがある。

迫撃砲(はくげきほう)――それが姫吹生レラのガルバニック・チャージであった。

「特注品だよ。よっく味わうんだね、御影っ！」

砲身が火を噴き、弾頭が射出された。

「させるかっ！」

オブシディアンはとっさに〈煙る鏡(テスカトリポカ)〉を作り出し、それを阻もうとした。

しかし、先んじたのはレラの弾頭だった。

弾頭が縦に割れ、中から広がった白い粘液が〈煙る鏡(テスカトリポカ)〉を包み込む。

黒い光は放たれなかった。

〈煙る鏡(テスカトリポカ)〉を無効にした粘液は、外気にさらされ固形化していく。

白い布地となり、オブシディアンの黒い体に覆い被さった。

「な、何だこれは……っ。力が――力が抜けていく、だっ？」

黒耀石の装甲が見る間に消えていく。

「あんたの量子変動率を奪ってるのさ」

ノッカーズ捕縛装備に、変動抑制具(オルタレス・ギア)という拘束衣がある。量子レベルで平行世界を観測するノッカーズの認識能力を電磁波で封じ込めるこの装備を参考にして試作された特殊粘液が、レラが用いた弾頭に内包されていたのであった。

「う、うおおお……」

十秒と経たず、オブシディアンは人間の――御影章兵の姿へと引き戻された。

試作品だけあり、レラの弾頭の拘束能力は低く、御影の左腕を胴体に貼り付けただけだった。

「お、俺の……俺の力が……」

御影は愕然と己の右手を見た。

「――BOOST(ブースト)解除」

何を思ったか、レラはBOOSTER(ブースター)を解いて生身となった。

「……な？」

茫然自失となりかけた御影が目を丸くする。

「ゴミ屑か……これまたおかしなセリフだね。考古学ってのは大昔の人間が残した遺物を研究する学問だろ？」

抑えられていた傷が開き、血が流れ出しているにも関わらず、レラは笑顔を浮かべて拳を握った。

「これでお互い生身同士——さて、最後の勝負だ」

「……………」

御影はそれに答えず、無言で掌を見つめる。何を考えているのかはわからない。だが、様々な思いがその胸に去来していることは見て取れた。

「……………いいだろう」

御影は開いた手を強く握り、顔をレラに向ける。

「だが、傷ついているからといって手加減はせんぞ」

「上等。そっちこそ右手一本で勝てると思うなよ」

御影がふと破顔した。

「もっと早くにこうしていれば……いや、言うまい」

すぐに表情を引き締め、拳闘の構えを取る。

「能力者だろうが普通人だろうが関係ない。人間らしく決着をつけようじゃないか」

レラも眦(まなじり)を決し、足を踏み締める。

二人は同時に動き、拳を突き出した。

「——よいしょ、っと」

屋上の縁(へり)に手が掛かる。

ぬっと現れたのは、黒装束に白い仮面を着けた男——ネクロマンだった。

その逆の手に黒い球がむんずと掴まれている。

「ご苦労ご苦労」

掴まれたまま腕組みをして胡座を搔いているのは、ギャラさんである。

オブシディアンの〈煙る鏡(テスカトリポカ)〉の直撃を食らい、影も形もなく消滅したはずの二人がこうして生きているのはなぜか。

観念動力によって収束された黒い閃光を見た瞬間、極度の緊張に襲われたギャラさんは、思わずギャラクティカスカイハイ——つまりオナラを漏らした。

ロケットがあらぬ方向に噴射し、ネクロマンに激突してそのまま屋上の外に出て、そしてさらに向きを変えて市庁舎の外壁に激突した。

至ってくだらない偶然であるが、ともあれ二人はこうして無事でいられたのである。

「お、あれは……」

ネクロマンは、屋上で二人の男女が殴り合っているのを見つけた。

女は全身傷だらけで、男は白い布で左腕を封じられながら、なぜかは知らないが二人共に微笑

を浮かべて拳を振るっていた。

「へ、変態や。変態さんがおる……」

ギャラさんは手指を口に入れながらガクガクと震える。

「――はっ、ボクシング！ いかんいかん」

ネクロマンはバタバタと懐をまさぐり、小道具を取り出した。左目に眼帯をかけ、額と頬に傷のシール、そして口ヒゲと出っ歯を仮面に貼り付けた。

「おおっ、俺も俺もっ！」

某有名ボクシングマンガのセコンドとなったネクロマンを見て、ギャラさんも慌てて顔を同じように変形させる。

二人の迷セコンドは、やいのやいのと騒ぎながら殴り合いを観戦する。

「いけっ、フックだ、ボディだ、アッパーだ！」

「ボディだ、チンだ、ええい面倒だい、足使え足っ！」

[……いや、それは反則だろ]

ダイモンがぼそりとツッコミを入れる横で、勝負は最後の時を迎えていた。

負傷と疲労により、女の膝がガクリと揺れた。

その隙を逃さず、男は右フックを繰り出した。

女は最後の力を振り絞って足を踏ん張り、左ストレートを伸ばす。

「うおおっ、あれはクロスカウンターの形っ！」

出したのは右フックの方が早いですが、ストレートは最短距離を直線に飛ぶ。

二つの拳は全く同時にお互いの顔面を捉えた。

一瞬の制止――そして、二人の男女は共に力を失い、アスファルトにくずおれる。

[引き分け……か]

ダイモンが呟く。

[これで、この一件もカタがついたってことだな]

「感動した！ 痛みに耐えてよく頑張った！」

滝のように涙を流すギャラさんの頭には、いつの間にかロマンスグレーのカツラが被せられていた。

「うんうん、名勝負だった……おや、あれは？」

深く頷きながら、ネクロマンは屋上に転がるダマスカス・トロウエルを見つけた。

「特撮物のオープニングを彷彿させるあの模様……いいな。あれはいいものだ。レーザーチェーンソーの刃にあれを使えば、箔(ハク)が付いて認知度が鰻(うなぎ)登りに……」

羨ましげに指をくわえるネクロマンの袖を、ギャラさんがくいくいと引いた。

「ん、何？」

「それ、もうやられてるぞ。ここに」

ギャラさんは額の赤い稲妻マークを指差した。よく見ると、それは超有名ライトノベルレーベルのトレードマークに酷似していた。

[あ、私それ知ってます。容姿端麗だけど実はアキバ系のヒロインのやつですね]

神楽がそのシリーズのタイトルを口にした。

「何だってえ？ おのれぬおぎざかああーーーーっ！」

ネクロマンは天に向かって哀切溢れる雄叫びを上げた。

[やれやれ]

その肩で嘆息しつつ、ダイモンは屋上に目をやった。

そこには、満足げな顔で天を仰ぎ、失神する二人の姿があった。

エピローグ

犯罪ノッカーズによる東久市役所立てこもり事件から三日後、練馬区のとある病院の一室――。

ベッドには、全身に裂傷と打撲を負った姫吹生レラが横たわっていた。

「お怪我の具合はいかがですか、レラさん」

そう訊ねながら借りたジャージを横の台に置くのは、中学生でありながらアパート・あおば荘の管理人もこなす横山葵だった。

「お陰さんでいい調子さ。明日にでも退院できるって」

レラは身を起こし、朗らかに笑った。

「よかったです」

ほっと胸をなで下ろす葵の足元で、ギャラさんが退屈そうに鼻をほじっている。

「あんたにもお礼を言わなきゃね。もう一人のノッカーズ相手に戦ってくれたそうじゃないか。ありがとね、ギャラさん」

「お、おう。礼には及ばん。侠者(きょうしゃ)として当然のことをしたまでよ」

ギャラさんは病室の壁に背をもたれかけ、腕組みをした。自分の格好良さに酔い、誉められた嬉しさで笑みが浮かぶのを必死でこらえている。

「ほんとに感謝してるよ。あのとき、屋上にあんた達が出てきてくれなかったら、きっとあたしは今ここにいないんだから……っと、そう言えば、もう一人はどこに行ったんだい？ あっちにも礼をしたいんだけど」

ネクロマンのことを問われ、葵は首を傾げた。

「わかりません。あの人は正体不明・神出鬼没のヒーローらしいので」

「そうかい。ま、ノッカーズに関わってればすぐに会えるだろうさ」

レラは窓の外に広がる青い夏空に目をやった。

その手に黒耀石の塊が握られているのを見て、葵はレラがオブシディアン――御影のことを思い浮かべているのだと察した。

御影は立てこもり事件の主犯としてBOOTS(ブーツ)に逮捕され、ノッカーズ用の留置所に入れられた。不幸中の幸いと言うべきか死者は一人も出なかったが、能力を悪用して破壊行動を起こしたことに変わりはない。二ヶ月後に開かれる予定の裁判では実刑は免れないだろうと報道されていた。

彼とレラが友人だと聞いていた葵は、どのような言葉をかけていいのかわからなかった。

レラの思いと葵の困惑などどこ吹く風で、ギャラさんが身を乗り出した。

「そういやおめえ、BOOTS(ブーツ)なんだってな」

レラは視線を窓の外からギャラさんに移す。

「ん、ああ、そうだけど」

それを聞き、ギャラさんがにやりといやらしい笑みを浮かべる。

「相手に取って不足はねえ、この前の決着を今ここでつけてやるぞゴルアッ！」

レラも葵もすっかり忘れていたが、ギャラさんは整理部屋での勝負が着いていないことを覚えていたのだった。

ギャラさんは跳躍し、両手をドリルに変形させた。

「一意専心っ、ギャラクティカダブルスパイラル！」

打ち出されたドリルは病室の中をバタバタと飛び、そして二本とも葵のおしりに突き刺さった。

「きゃああっ！」

恥ずかしそうに飛び上がる葵を見て、ギャラさんの顔色が青ざめる。

「す、すまん葵、これは何かの手違いで……」

わたわたと手を振って弁解するギャラさんの眼前で、葵の眼鏡がぎらりと鋭い光を放った。

「三十六計逃げるに如(し)か——」

身を翻そうとするギャラさんの左右のこめかみを、葵が両手に装着したドリルが捉える。

キュイキュイという回転音、ガリガリと何かが削られる音、そして断末魔の悲鳴が病室——いや病院全体に轟(とどろ)いた。

「あっははははははっ！」

レラは腹を抱えて笑った。

「よしてくれ、傷口が開いちゃうよ……………ぷっ、あはははは！」

と、もう一度思い出し笑いをする。

「ひい、ひい、ああ苦しい」

「本当にすいません」

葵は顔を真っ赤にしてうつむいた。その足の下には、生ける屍と化したギャラさんがぐったりと倒れている。

「いいんだよ。ちょうど気落ちしていたところだったからね」

そう言って手を開き、握っていた黒耀石を葵に見せた。

「葵ちゃん、キラキラって言葉の意味を知ってるかい？」

「え……いいえ、知りません」

「じゃ、教えてあげよう。キラキラってのは、そもそも雲母(うんも)のことでね。暗い中でも光るその様子を雲母(きら)と表現したんだ」

「へええ、素敵。黒耀石と一緒にですね！」

「そうだね」

十一年前の自分と同じことを口にする葵に、レラは微笑した。

(あのときのあんたも、こんな気持ちだったのかね)

そう思い、夜空の星々を手の中の黒耀石と重ね合わせる。

「私、何だか黒耀石のことが好きになってきました。和田さんに頼んで、また整理作業のお手伝いをさせてもらおうかな」

にこやかに語る葵の目は、黒耀石とよく似た光を湛(たた)えていた。

それを見て、レラはぐっと胸を詰まらせる。

(御影……あんたの心配は、どうやら取り越し苦労になりそうだよ。あたしやあんたみたいな大人がしっかり伝えれば、考古学だろうがノッカーズ問題だろうが、子ども達はきっと悪くない未来を切り拓(ひら)いてくれる。だから……だから、道を諦めるんじゃないよ。自分をもっと発掘するんだ。そして、もう一度立ち上がれ、御影章兵)

レラは再び青空を見上げる。

「あんたなら、きっとできる——」

そう呟き、友の再起を心から願うのだった。

了

エクスカベーションX

<http://p.booklog.jp/book/8517>

著者 : sasagani

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/sasagani/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/8517>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/8517>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ